確乎集 一

和書門
類 九〇六九 號
函 架
一 二 冊

内閣文庫
和
九〇
一一〇 函
一 二 冊 架

内閣文庫
番號 和 9069
冊數 12 (1)
函號 210 40

210-40

Kodak Gray Scale
© Kodak, 2007 TM: Kodak
COLORCHECKER
x-rite
MSCCPPE0411

国立公文書館
National Archives of Japan

蛙　八雲抄

弘徽殿女御歌合に、赤染衛門に
鳴るよりの義忠雅朝臣云
[illegible]

不可拙云々先万葉の歌を不
知先鶯々々鳴るといふ云々

うぐひす　鳥　清輝

秋といふ流れのれるも秋里
にたえる小雪の数ふにのうら
山中にいつもなくといつて雅に
して意云々

雀　鷹　同

友より羽のぬけかはるが多く風
ふきめて飛ひ羽の出抜ひしする

花廼家文

を盃の有靈の箸をとるとて
東多羅より出はじめより箸
摩と中一とこゝり云て

須戸清抜　連歌新式増抄

為上巳日可為妻也三月をも
の巳の日源氏は用ひて始そ
しるるゝ人はまるゝとも上巳
の日をもくはす云て

うゝまけて　同

をるまけてといふ事さのうてと
いふ心なり罷とをきて用ひて
よめる事なり云て

山蒿苕　同

山蒿苕とは未なり田舎人是
はをのをといふとれなり云て

いちこの花　同

いちこのをるといはれ
花なり云て

くたつ鯉　同

冬の鯉をくたつ鯉といふ
なり云て

忘草　連歌新式

ものをもわすれぬ草といふなり
萱名草とは忘草とのけ云て

桜鯛　摂陽群談

當國住吉郡境ノ浦ニアリ夫木集
和泉國ニ比ス今摂泉ニ懸テ網之
春ヨリ夏ニ至リ多ク捕得ルヲ以世
号之事非也當浦ノ鯛厚味ニシテ
鱗ノ櫻色成ルニ因テ号ケタルノ

所傳タリ云ヽ

若菜　同

當國兎原郡中尾村ヨリ毎年若菜ヲ摘テ献禁裏之舊地ナリ凡延喜聖帝ニ始テ御調トスルノ所傳タリ云ヽ

前垂島蟹沓　同

當國西成郡大坂道頻堀ノ西ニアリ前垂島ハ今ノ地名也此島邊ノ蟹蟄穴ヲ出テ水ニ遊フ漁者芦ノ葉ニ隱テ伺時ヲ竹筒ヲ以テ數百ノ穴ヲ掃塞テ捕之即浸鹽鰒トス多ク百姓ノ家ニ來テ田植ノ時菜物トス往古為贄ノ蟹沓當國ニアリ其所出方角不詳蟹ノ

漬物ハ其ニ傳ル欤云ヽ

住吉洲蛤　同

當國住吉ノ洲崎ニアリ漁者捕之蛤ヲ捨テ其子ヲ升ニ盛リテ市ニ沽或ハ社參ノ貴賤此松原遊ヒ酒宴ノ興ニ乘ニ來之芥酢ヲ與フ因テ洲ヲ酢ニ作リ称ニ酢蛤蜊ト云ヽ

西宮ノ水魚　同

當國武庫郡ノ漁者當浦ニ於テ捕之味勝レタリ宜ニ市居ニ送リ称ス人來之云ヽ

松露　同

當國住吉社ノ松原ニアリ土人拾フ之市居ニ送ル味他ニ勝タリ云

鳴尾西瓜　同

當國河邊郡鳴尾村ノ田圃ニ作リ所々ノ市ニ活リ近歳人多ク喰之瓤赤キヲ照ト云リ當所ノ西瓜能照テ味甚美也種ノ黒ヲ以テ宜ト云ヘリ

沙魚　同

當國西成郡安治川ノ西潮境ニテ漁者釣ヲ垂レテ捕之市ニ店ニ出ス云ヘリ

氷餅　同

當國島下郡勝尾寺山内ノ僧坊ニ製之冬月雪水ニ浸シ晞之雪ヨリ白ク味輕キヲ宜ト云ヘリ

表されて　古今集雅抄

ノ秋されてふ物を　表去と

このく此去いひぬる葉にあらはれ

きてるんや葉に　三冬盡

春去来と詠りこれい東ノ

ちめてきたるんや云ヘリ

さるのこけ　同

さるのこけい岩にさるのたる

苔ノ如ク日蔭のこけ云ヘリ

くるふ　同

くるふい苦丹山門寺動寺ふあり

と云　蕚の葉のちいさきもふ似

たりと云　源氏に宮法ふ法ふ

こしらへとうけり　芝いもみち

たる芋の葉ちいて木にさ

つくと云　蕚説同蕚一説ニくるふ

ハ岩屋也くゝんとし寺名に
なぞらへ云て

縣召　同

縣召ハ来二月外國人に官を
なさるゝなり二月ふるまる也
官召ハ来官を京中のをゝ
さるれハ又外国の人を官
をなさる来ハ縣召外ハ官召
也云て

うけ鷹　西園寺殿鷹百首抄
うけ鷹とハ百にて鷹をもくて
多をたてゝあそぶを申也云て

清仏名　年中行事秘会注
仏名ハ十九日より廿一日まて三ヶ日の
百三世の諸仏の清名を唱へし

六根の罪を懺悔を行るゝ也寶
亀五年十二月よりもはじまる云て

同　菜花抄

十二月の十九日にあるゝぬまゝ
清仏名とて地獄絵の清屏風
なとゝ出てもつらふ云て

同　清少納言枕草子

清仏名乃あしたにまこと恵の
清屏風ゝ立ならへて三世ハ
らんせさせなゝ云て

蓮の浮葉　同

そうすれとうき葉のらうけて
のとのゝすゝめる池のをもてな
おもゝきなるとちいさきとひ
ろこりてよひてあるゝ

いとはのー云々

瞿麦（ナデシコ）　同

なでしこかれはさぶるり
やまとのもいとめてしめー云々

かはつの花　同

かはつの花らうしけ也名
ぶうしてけるかりのよるを
なとそにかさるる云々

撫子（頭注）　枕草子

かはつの花は紙屋の事
花とおよしいとり　世々原千年
紅といふあやー云々

松虫　鈴虫　年山紀聞

松の〜夢ふりて名津をうり
なをもていそ〜恋ふりむ

何の先いろなるはもむ〜　如
義の神官等〜云々
禁裏院中に生るるなく
ようまるり聞ふにてはうり
ちかてはかくしう云々

擬階奏　同

吉記（吉田大納言経房卿記）　寿永元年七月六日
云外記史生季俊持来擬階奏
加署返給之云々

死免状　同

資益王日記　明應十年正月一日云
諸社之遥拝之後三献有之次有
経次御コウ次比目始云々

八朔　同

永享日記　寶治元年の下に云

八月一日中宮乃御方よりまいる
まいらせしほうし物の世にひつ祝
事ともはひうるしう侍り
しかも
ふいまいらするうち物の名をさして
まつめハふみのなかに御ひとえなる
拂ましハ此周傍の名をふる
物とをせめハふみのなとにふみ
合をさうはれをふくむの節と
いふすこ世の名を見ぬへし云云
いきみ玉　同
親長卿日記文明八年七月十一日
云参内若宮御方以下有御祝
之儀 いきみたまと云云
今按いきみ玉といふは文明の
前後よりはまいりを待つ七月
の盆にハ亡者の霊魂の来るとしを
いひて祭るより帰りて現存
の父母兄弟などの生御霊を
祝ふんなるへし云云
水無月ぞよし　同
六月に風あれそよ無月霜を
閏月よりおこれるかよし　山槐記よ
みえたり云云
八幡臨時祭　袋双紙
八幡臨時祭ハ先朱雀院御時被始
行也件哥ハ貫之奉之其哥ニ
松も生又も苔むす石清水行末
遠く津のへまつらん云云
青刺　奥義抄

いとおのつき世玉のすりとまい
らせてるに、あをぎ（まきえて調うる系るく）
といふものを人乃そてひてうそ
（清女うり后宮）まるきうすやうを艶
あるすぐものふるに、きてこれ
まぜこりかりくハ（までこりとたたおもて）
ハとく（ハ同まうしおもて）
とてまつらせてれい
（后宮は手）
皆人い花やてふとというぐ日を
わかてろをいつ君てちりる
と紙乃そをひやりても（刺つこ）
（うまるのしく）
うせのつるもいとめでたし云
さまひ
鏡
垂仁天皇（即位）七年とやしにうす
すまひいそぐまり作り云
同宴　同

景行天皇（即位）五十一年とやしに
同宴おいとなひ作ひ云
あり　同
神功皇后新羅征伐の時まつふと
いふ河に御ふいのりしのうま
いくそ西乃國をう屋さ
あらぶつりさう所ふうを
えんとて作り作ひにあり
を作りあけ作ひりき云
摩物　同
仁徳天皇（即位）四十二年とやし九月
うそ生うれ多をとるとふこと
いまり我めて物そうめ作ひ云
雷　同
敏達天皇御母時於そり乃ふ

き田をつくるものあり夏に
なりて田に水まうせんとせし祝に
俄ふ神なりあるいはしのぐ木
はたちまちにまちいりてあり祝
きそのまくさいづちたちこ
きそらうちおされきるのごと
しきおとこすきをもつて
うたんとせしばいづち我
をとうはするなれふれ
ぬ息をむくうんとひきた
のこのいきあふるとし息
をむくびきそといひきいづち
こくていきく汝き子をまう
けさせしうれにて恩をむくん
ひもきくまれ木乃手を洗く

○用明天皇二年七月。

りてみをいれて井のをとう
うべてはみやたあさよといい
ひしそぐ井をのこいづち乃
いふがきくしあくはた
いづち光をこえまれいち
そくのありにき云て
ぬるで　用
聖徳太子ろうれ大臣そそうと
いくきをたこうて物屋とあ
かひ孫ふ物屋ぶかさのいくきずず
をもくざりしうば太子のほろ
のいくきをぎをそれて三こひ
まてもりぐ記かりき子時
き太子大誓願をたこうぬる
で乃木をとりて四天王をきぎで

まそまつりていはれしとき
をそきまそまつりていなもちゐつ
ところ乃矢ハ四天王のまもり
給ふところなりとの給へせて
そのりをていさせ給ひ
かむそのや守屋うもねりあく
りてあもちごころを命を失
ひつ云々

維摩會　同

齊明天皇三年（即位）とやしに鎌足病
をうけて大くるる給ひ
浄門院のたまはせ給ひ
百濟國よりきたりし尼法明
といひし維摩経をよみてし
病をいのりんとやしこれ浄

門院のたまはせ給ひ
法明尼経をよみ給ひ
鎌足のほ病をこそ給ひ
さてあくるとし山階寺をそ
維摩會を始給ひ云々

三井寺　同

天武天皇朱鳥元年と年号を
さだめあくる年大伴皇子
は父の御給ひをそ
三井寺をつくり給ひ云々

踏哥　同

持統天皇七年（即位）とやし正月
踏哥ハはじまり給ふ云々

釋奠　同

文武天皇五年（即位）二月丁未日釋奠

いはゞまゐをうけ給はり侍さ云

追儺　同

慶雲二年とし世中人ちかをうてとゞらふ人和ほのうそ追儺といふるいそぎうしなり云

放生會　同

養老四年九月六日向の国木ゆけさるかひ平ぬとも有しそ宮佐宮の神き宣旨をこうけさまつりていくさをおこしてこれらをうちうちけてきろ平ときうさ平宮乃詫宣に弥てたてまつりあいおほくの人をころきこれよりて放生會をすゝしよるあいせ平そ平より法王の放生會いそじはりしなり云

そのゝの法華会　同

延暦廿一年正月十九日に薬師ろよしそのゝの法華会ををこなるひはじめき云

同海義　同

弘仁四年正月に法華会のうち海義いはじまりしなり云

仏名　同

兼和五年十二月十九日に佛名いはじまりしなり云

灌仏　同

兼和七年四月八日そゞめて灌

仏ふをとこのもれるなり云て

賀茂臨時祭　大鏡

寛平元年はるのとし十一月廿一日つもりのそもそも日かも臨時祭はじまるこのまうきよりなり云て

すいもん　博鏡

あこうこうまるせどの法りどの屋いてさせたひとひめすいもんあるうのあるとわう紀かんせもつめ屋上人ぞうふ法つさせて云て

あしろ　同

寳治元ころ神無月廿日あまりありしや紅葉はらん

しかい宮治ようあきしなるす

中略　卒等院より中一日わうきを

あひてさふくはしろきあしろ

るとも今ぞもあしろ

元をのようるはるふけしあるしてふを引云て

俳甲　同

十月十日頃よりはうふとの

花くをもるをいろくを

おもくまりけり云て

松茸　同

建長七年なの月の比左の大臣

近衛殿　日野山庄一院新院

大宮院はは幸なり世を思ひ

よりを法くする中略上達部

廣上人より馬牛ひらる銀乃
かさみを五ましてせて松茸入
らる山つゝれいしせおそ
ましてほらんのちほうふけ
いくあとをくきてこめせよ
も云ひうれさまゝりしせ
きねえ

移風　円

建治三年二月廿二日朝覲行幸
龍山廣へまゐる上達部廣
上人まいの色くれたりけ襲
をとりあつうちあめてさゝ
かりさは茶乃大井川よ
龍頭鷁首うのくらるを
入て移風ゆるめて舞大

しゝて乃せゝ廣云

撰集抄

一乗北法位の舟大和より成を
まいゝせて付りけるに、強忠と云
醫師の乃ふ、ちい茶まさふ
らひひるゝ此瓜の中より其一つ
大なる毒をふくゝりくいるん
者い廣このてうまを廣ゝゆ
此よりゝ帝にゝゝしまるに
不思義乃るにゝて時ゝ
中旨やあるかれ城めせとて
清盛と云陰陽師をめまれて
此瓜の中ゝいるるてりある
うゝるひゆせと作りされ
けるに清盛不とるゝ大なる

通気をとゝのへさゝえ
行なるよゝ行ゝせようとめられ
て神呪をして行ふに面白
このごとくの瓜の中より大な
る瓜一つ板ばなより二三丈ばかり
おどり出るを座しをみて
さてい中より二つにわれて
一丈あまりなる蛇一まきもたゝ
出て則死さりしと云
鞠　同
さいつこと後伯侯大納言成通
と云人おり給ける壮年より
鞠をこの男と或いひとり
或いは友よ博ぶりて是を興じ
て日こに勇ゆるすゆゑ
あるとき院参院さて殿ふ
心をゞめて是を落てりけるに
いぶくものいつくよりまう
ともしらぬ小男出あこと
あてやるうせくまりて伯
大納言あゆをおりて落
うとしつゝ落を我小男鞠の
せいなり君のめてしく落
さよりてまりの姿をあ
にゝんとてうきけれやう
失なりう平後も成て出れ
しくある男出来て目前に
鞠を見て伯りけいとゝ
しきりぞ伯るはしる者をき
て清水の義基のうらん

そはをけ法ゝりけるを
父の宗通大納言あやぶみ
うゝんなく芸ゝ法ひて書
いさめんとそよびよせ法ひるに
きゝみのうゝ五寸ばかりなる
木をゝれいを化人のようそと思
ひ法れいをを会ておどろてのき
法ひあるをみちも大よ
木それ法ひるをそ後大納言
ものとまひゝ鞠い用ゆ天皇
の法ゝ太子の法つれをなく
さめなんとて月卿雲客の
法ゝり出ゝ法ゝり太子の
法鞠めてゝゝ木をまゝり
ゆるめと一ゝ人もめられて何
の木をもさゝ法ゝて猶あそば
るるに法ゝ法ゝ粉十人が音の法ゝ
りをいゝ三世の賢たちのあ
そ法ゝるもゝ又鞠のせいとも
なりもゝ何をもゝりゝ法ゝ
但扶桑記ゝ平氏者ゝなかう
ゝと法ゝ法ゝれゝ実も
なとけたちのはそはるに
ゝそいと見出ゝゝ芸ゝ法ゝ
経信大納言後忠中納言とそ
当世の功者哥鞠の長者なる人
いまそうゝゝゝ法れ法ゝるゝ
君の法ゝ家なんゝ鞠ゝ出さん
松ゝゝ柳の枝ゝ三ようれ
ゝん中の枝ゝゝゝ引つめて

つけて木の枝を上まなし
申三の〻りの本は一の角をよりて
右の印ざを使きて人をのへ
て立使きるり大うふまりは
いうまも為あかうちをとりかつて
書いて製来の角をんのたがぬ
程なりうまに使うんまりを
鞠を出しかいに使りにつ
よくあうる角義ざとうく
我為をも使うひ使ん
るは毎年にそ使る使りを
使あんくくそるるは
かうくこふきりとつも我朝
にこれをあきにし使三段
おるうふを五足は使ひし

すうをいその使そ鞠をりう
よのうんとし使るは足甚し
きにざりの使ん松をつふ
まりは上をそりまも使れの角
ま木つるなるしきりあれそ
左の印をつまそ右をよ角ん
よ角より使り柳はかるまりは
枝をるひて提つるる中りきう
るりされそいうこうをそふ
刃をうを我やうにるりまりを
うう犯使るしとそやされ
りる此二人はまりのせひを見る
まそいいうで使ん未世はあ
まうう犯わどの人とるみていすそ
りりされい侍後大納言さ使ひ

をとり給ふべとうそ成通もあ給ひられ

鳥羽院の御くらゐのそんめ
はまり給そびのありけるに
御ものを清家に出されんとする
ありさまのるをい侍従大納言
あるみちの平人なりしいま
そうりるまへ始るはうりのそん
べりるに六日の申のみぬるまて
まうり給へとも御所大納言
殿信てのそうにて松のえぶを
御ものを清家に出されるそう
なりみちのきもの御いるあひ
うまうてはうきそそ清代の
そうめれ東のまう殿い梅の

えぶをとうそそそつけるなれ
そんをり松いつもみとうに
して東をとまるをいかはよ
えくさんめりあるきいそるの
えそうなるみもまりそるか
れそるそのちそるうに
まうて成通六十よろいみき
たまひて後二条院の清代
のそうめいはまり何そ元の
妙後成中納言の所のえぶに
御りけつけて出されり侍
従大納言清家御所へ出て此人
父のとうたで中納言さいはまう
にうとはめ給へり云と

巖嶋

同

安芸嚴島の社は後は山深く
森り茂り前は海左は野右は松
原なり東の壁の方に清水
きよく流れり其を汲み井
と云清社三不は木は一ますも
又ましまし茂り方より引のきて
南北三十三間東西二十五間
の廻廊佳志不のうり樹は檜の
廻廊乃板敷の下まで海
なる檜の引樹は白すなこ五十
町はうるるり志のあれは檜の
さしたる樹まれれで松
廻廊まで茂るなり者
いこ　まるり名くもるく
佳似いなる清るなん

清巖乃上ハ清正祈乃鏡
我魂ましくもそぼすより下に
うけまいらするなり社の
清神は女房神にて浪厚
れはかくはなるせるなん
大方は清社は山上にあり廻
廊は平地なり　東西南乃
三方

卯花月　同

治暦四年乃卯花月乃中の
十日乃ものこと云て
嚴島明神　本朝年代紀
松尾御同體推古天皇三十二甲申年
十二月始御殿造營其後平清盛
再興文弘治二年陶晴賢滅亡時兵

火又後大江元就建立云々

白馬節會　同

光仁寶龜六年正月七日白馬節會行又桓武和元始御覽白馬節會云々

新嘗祭　同

用明天皇二年四月始被行供初稲神之儀也云々

東福寺　同

四条院延應元年草創九条道家號惠日山開山聖一國師云々

土牛像　同

文武天皇慶雲三年始土牛童子之像於立禁中之于四門其比天下發疫病甚民多死依之土牛於彩五色立之云々

茶　同

嵯峨天皇御宇始茶弘仁元年茶儀式始云々

若菜　同

醍醐天皇延喜十一年正月七日始供若菜云々

蠶　同

元明天皇和銅七年養蚕於始献出羽國云々

薪能　同

嵯峨天皇弘仁十二年始云々

大文字火　同

桓武天皇御宇始灯東山淨土寺山大文字送火云々

大嘗會　同

順德院建暦二年始被行大
嘗會云

鷹鳥　同

神功皇后四十七年四月朔日始來百
濟國云

暦　同

欽明天皇十四年始捧百濟國博士
暦云

七種節會　同

神武天皇御宇正月七日始被行七種
節會宇多天皇寛平二年正月十五日奉
七種粥是爲恒例

馬　同

神功皇后四十七年四月朔日從百濟
國始渡干日本馬云

艸餅　同

雄畧天皇御宇此事行云

灌佛會　同

推古天皇元年始被行灌佛會云

升　同

文武天皇慶雲二年始造斗升賜
諸國又和定升法後三条院延久四
年也云

菖蒲　同

仁德天皇卅九年五月始天子獻菖蒲云

酒作　同

應神天皇御宇始百濟國人來始作
酒漢明帝時石祚始來出之云

曲水宴　同

雄畧天皇元年三月上巳始有曲
水宴云

菊　　同

仁德天皇七十三年始渡大唐菊種青黄赤白黒云々

弓　　同

神功皇后元年弓本朝始云々

田守　弟引板　和歌古語拾遺　秘義抄　上部

をとめ守とゝ田のほとりなる人也ひとゝ云物なれはをとめもよそもを
をふくみあはせ田さゝ猪のもとをもむといふこと云々

をとめやとりねぬふしひるの音もをしのうさ　稲葉集　俊頼　遍昭

十二月異名　　同

正月　むつき　　紀友則

むつきたつもとてやいつしらとを

四方此山を乃みすとゝんとん

二月　きさらぎ　　きぬさらぎ　紀氏云

三月　やよひ　　敏行朝臣

ふれて行やよひの雪をなをもまれ
八重のうゝ紙かつるうゝ

四月　卯月　　源宗于

卯月をはくうん花さうりをて
いつしらきかくやをまはをを

五月　さ月　　元方

郭公五月乃雨をうりをれて
をを郭ををいふを橘ゝ

六月　みなつき　　小野春風

三月北河ををををさよをを
ををををあを乃風のををり

七月　ふみ月　　貞文

きぶつのとゝはるいたさいくん
まれよあふつきふりなたつん

八月　きつき　深養父

おとろれよりあきこゆるもつきうち
秋のいろはうたりのすに

九月　なつつき　貞文

わうやとのまのうちれはしの菊も
あうつもよりはさきつなりけり

十月　神無月　素性

神無月しられて後の木葉をそ
うらふれなる井出錦成れ

十一月　霜月

霜月まつに雪きのうらとなりなり
さらねにはある霜月乃雨

十二月　おいすす　業平

なるとるく雪とるとれ雪に成なり
あいれるなるとるとれ乃雪れ

又　紀義名あり

正月　さみとり月　貫之

とられてさえとり月さなぬれ
和さく川　小松引くまの

二月　むめさき月　友則

うくひすのなるねちとのもとあひし
花さうなるむ免月さ月に

三月　さくれさ月　同

春へ原をる花りかくまなり
さいるさ月うまやるまぬる

四月　おとのとり月　家持

きりねていなにるもつお部出
おとのとり月きるはなうん

五月　さくら月　小野篁

池つゝみまこも刈すゝめあやめ草
やとにかけしさくら月とて

六月　いまこくれ月　本延院大子

ほとゝきす鳴こゑ聞てうゑるなり
いまこくれ月まるぬるゆとて

七月　めてあひ月　源井人真

牽牛織女めてゝあひ月
いたんれうれうるとん

八月　さゝ月　兼藝法師

きりゝゝすさゝなる月うちひて
あきちかくふんゝ急よるなり

九月　いろとり月　菅原忠貞

紅葉まいろとり月さるぬれい
ちきせさんこちあろすれ

十月　ふみ月　同

よも山かゝるれなの月に成
紅葉ゆゑ神なりう月

十一月　霜こうり月　公

法ゆこうれ月乃月をかもれい
なる成雪けよろなりわりる

十二月　年よりむ月

年よりくよとつむ月いくまれ
このさゝもてもみ祝まいうき如

暦　和事始

政ゝ要略巻第廿五云小治田御宇
十二年　歳次甲子　推古天皇十二年也　二月
戊申朔　日を以て始て暦日に法
用られを以て見れい推古天皇
乃時より暦法用ひ始り云

琴　同

命婦石川老子と云へる人筑紫
彦山にて唐人に逢ひて琴乃ことを
ならひ〳〵て多天皇にさづけ
奉る河内乞琴乃始也

酒　同

舊事記を按するに素戔烏尊
脚摩乳手摩乳を以て八醎
八甕乃酒を釀さしむとあれば
乞酒の始也又木花開耶姫
田稲を以て天甜酒を酒師の先を云なりし
ものなるあり人代に及て邪功皇后
三韓退治ましまして帰り上らせ
ぬるに誉田皇子を以て角鹿の
気比大神をあれまつりし

めぬるに平茸なる酒を献ぜしに
行ぬるに〳〵なる所に皇子帰り
ぬるにこれをすゝめて歌をよ
みぬる武内大臣皇子乃為に
答歌しぬる所を酒樂
乃哥と云古事記に見へたり
又應神天皇の時百濟國
酒を釀元る人名を
仁番須々許理乃系り酒乃事を大法
酒をかもして天皇に献る古
事記に見へたり乞より酒
乃制法整へ有る
なるべし今の世界此中日本
乃酒に及ぶなりとや

菜　同

海人藻苅といふ歌は藻は上
古より我邦にあり 挽藻節会
て用ゐるおのおの行はる公事
儀式にして藻上俗正入唐の時
茶を茶の種持渡され栂尾明
恵上人これを殖てうとうけり
栄西もちかへる藻をたねとこれを
栂恵上人おくられる栂恵伝記に見へたり
上古よりうけるる他乃おりて
おもひ見るべし 中異日本に
茶殖うえおけるるは茶湯
記 霊岩寺本 他の作 建仁寺乃開山千光
国師栂尾の明恵上人同じくして
入唐し同時に帰朝しけるが
茶は種を持来て殖栄国背
振山にこれをうゑ岩上茶と号

此上人これを栂尾さうめしと又
宇治ようまとあり 多羅同定集と云ふ歌恵上人
茶実を栂尾と宇治に
うゑしを記せり 是日本乃茶
殖うゑる始なりて是より
所々に殖ひろまりけるあるし云
唐特 同
仁徳天皇四十三年九月依網乃
屯倉に阿曇古麿をまる百
濟乃王子酒君和泉國百舌
鳥の河畔に来て雉を放
是唐特の始なり 日本記云
角力 同
野代と建部雷神建御名方神
力競べしるあり 旧事記 是角力乃
鑑なるべし云

国立公文書館
National Archives of Japan

田　同

天照大神稲種を天狭田及長田に植ゆ（神代巻）是田乃始也云々

孝徳天皇二年に凡田八長三十歩廣十二歩を段とし十段を町と定めらる（日本紀）

陸田　同

天照大神粟稗麦豆を以て陸田種子とす（神代巻）是陸田乃始也

墓　同

饒速日尊神去ぬ（世天孫降臨）神衣帯に入れ三柱を光美白庭邑に葬斂てこれを以て墓とす舊記に見えたり

墓地始あり

梁　同

神武天皇吉野に到りぬ時に川に浮て西に行ぬ梁を作て魚を取る（日本紀）是梁乃始也

菜猟　同

五月廿日に百姓を催めて菜とす也（日本紀）

推古天皇十九年夏五月昔莵田野に菜猟せしとあり是より始るなり

女叙位　同

持統天皇五年正月朔日内親王女王内命婦に叙位

湯ノ日本記皇女叙位乃始メヤ

賭射　同

天武天皇五年正月禊を置

西門庭ヨリ射サシム的に中れ

禊を賜フ差あり日本記湯射

乃ちはじめなり

通矢　同

京都三十三間堂ヨリ通矢を

射るるハ其ヨ長十一年正月

十九日石堂竹林ノ中子茂岡

平右衛門と云ものはじめ矢五十

一節を射通シて名誉を

得ること是よりはじまる

鵲　同

推古天皇六年夏四月雉海

吉士磐金新羅より至り

献二雉を献る雉海柱ヨ養

しむ国にて按ヨ菓てこうむ

日本記　皇我ヨ勝ある始なり

今も国ヨりて是を養ふ

麻　同

天照大神乃汝舟麻績祖ヨ

白服神をして麻を種て以て

衣服を作らしめ給ふ記

蕎麦　同

仁明天皇嘉和六年秋七月

畿内国司に令して蕎麦を

勧種しむ土地乃天香ヲ

かゝらず播種服穫せよいでき

稲粱乃如食とすべしと

国立公文書館
National Archives of Japan

を以て也後日本紀に花萼を作る
乃そしめ也

橘　同

垂仁天皇九十年春二月天皇
田道間守を命して常世国に
遣して非時香果を求しむ
今橘と云是なりと日本紀に
見えたり是橘乃日本の始
也

番梅　同

外國不ようして平形かつ形
日本のハ長形氏朝鮮をうる
せて付をめて取
まれり故に高麗こせうと云

西瓜　同

寛永年中えそこより
平種初て来る

秋海棠　同

寛永乃比始て京より
来る

初春　年庭記

早春初春乃名目ハ中ゆうハよ
春ハ元日から二日三日の内ひ初
春ハ五日六日をいふなり又立春乃
前ハ早春よハあらず早春の前ハ立春
よハあらず

七夕　同

禁中ハ七夕をまつ節と記所九り
たるなり

夏出　同

同云 夏虫と蛍をや 仲哉 芸
わらるるやゆるりみせたるや 仲也
つ神なまづや 火なるとをるを 夏虫
とやゆるりいれもよるやうなりや 也

そゝ子多 壁案集

そゝちとうとうとひたちなふ
みとゑきて 八月の名きりさく
はるとて 初わく乃名を百ノ子名
ともいふとやそれもうくひたを
む神とたつまう

いるおやをを 同

芝名さ浦くよ法浦彩法才の人こ
説てをうきてるきふさる 也
あるぬ士安義國はまうれりるよ
みちて紀おりあてなきけるを女の

見けるを見ているおわををとひ
りるを仲ていなと芝名をいるおわを
名をといふそと問られい芝名きこり
るく財田ち稲をおひて家とよ
をとひをけちや也といひりう國
こ田舎の人をう屋うのるを屋
といひ出をわりくゆうあきして
のちよ安義あよかよ人よとくも
こなおあ者さ浦よゆたるよりを也
大和河内なとをもあまねくや
よゆ西元とくよ神ていそんより
國こ土民の法もち井屋くや
人のんよをとふ屋

右巡言場の記おり乃日 同
まあこ乃生法こおりも法さしく

禍を引れてきたるなげかわしといそん
さうそくきとの荒を法もおかせうと
なれとあらをつうひそうとの屋なるる
るまてまて法をひをむねをあれい
世るあらてきこの

そう菊　同

百草集よそうとつうつる同おる
心おろくみのそうのむ多そうひる
えの屋竹そうなとまてをひをえ
なるるりをそうといてり

寒食

春城無處不飛花寒食東風御柳斜日暮漢宮
傳蠟燭輕烟散入五侯家　唐　韓栩

松ろう

沼屋愚事抄

正本のうつふい本の為之天のうをめ此本

のうつふませる本あれそのすあるまや

井　漢事　始

淮南子ニ云伯益井ヲ作ル注ニ益舜
ヲ佐テ初テ井ヲ作ル世本呂氏春秋
ニ云伯益井ヲ作ルト云世本ニ又云
黄帝始テ井ヲ穿テリ周書ニモ又
黄帝井ヲ作リ給フリト云

元日芸香　同

通典ニ云漢高祖十月ニ芸香ヲ宮殿
ニ進ス歌首ヲ為ス七年長樂宮ニ
ヨツテ拜ス新ニ芸香ノ儀ヲ制ス武帝改
テ太初ヲ用ヒ寅ノ月ヲ以テ歌首ヲ
ナレトモ元日ノ芸香ハモト漢ニ始
ス事也紀家ノ令抄ニ寅ノ月ヲ正月
ト云ハ漢武帝ヨリ始ル

釈奠　同

往世格要云隋の制は國子学ありて
毎年四仲月二月五月八月上丁皆先生孔子先
師を釈奠し州縣の学は則春秋
の二仲月を以て先師を祭れ春秋二
仲月釈奠の始也　月令廣義

頭巾　同

いまゝ皂羅を以て頭をたゝむこれ
を頭巾と号す蔡邕獨斷に云古の
幘紫をつゝむを巾とす巾を幕と頭巾
なりしを則始て巾を被す

被　同

詩經小星の篇に抱衾與裯注に云
衾は被也論語に云孔子必有寢衣
長一身有半此二乃ち巾の部類の
名れて數らく三代よりの制なり

西京雜記に鵠鳶の被あれて漢の
財始て被と名つくるなり

占稲　同

江淮の間に稲あり粳糯細にして
穎昇まいたまれ実をなすこれを
早しと宋志家かつて苑中に植しむ
始し占城国より種を得て南
方に植る故に占稲と云

胡麻　同

漢張騫始て大宛國よりこれを得
て故に胡ごまと云

波稜菜　同

唐會要云尼婆羅国より波稜を
獻る

牡丹　同

隋煬帝の世より始て牡丹を侍人庶乃代より
木芍薬と云開元の時庶民家宮中及
民百姓ことごとくこれを尚ふ今平居毎極
て多し

安石榴　同

博物志に云張騫西域より使して回る時
始めて之

葡萄　同

さて大夏より出石榴と胡桃とを
もつて漢書西域伝に漢の使ふる時
葡萄苜蓿の種子をもとめるとある也
酉陽雜俎に云張騫ぶいうに云

橘　同

後漢李衡甘橘ノ樹をうえ
あれば平時久しきをもつて

胡桃　同

博物志に云張騫西域より使して帰る
時胡桃を持ち

木綿　同

通鑑の梁武帝木綿皇帳の下
に史炤か釈文に云木綿の記事に多く
これあり表二三月を以て種を下し
すなわち生じ一月に三ヶ度ひらきさき
て秋に至り黄花を生じ二三日にして
落ぶ熟すに及て平皮四に裂
平中綿出て綿如しこれを以て
紡れば絮如し世にいう木綿あり丘
文莊の説に綿花元乃始中国に
といつるいまる史炤の説を考へ
さるべき也　楊升庵文集

暦　同

通暦に云大異始て甲暦あり楊泉が物理論に云神農暦日を立漢律暦志に云黄帝暦を作る尸子に云羲和暦を作る呂氏春秋に云容成暦を作世本の流れ同黄帝内傳に云黄帝蚩尤をきり則容成に命じて暦を作りて以て天を司らしむ事物紀原

律　十二律也　同

呂氏春秋に云黄帝伶倫に命じて解谷の竹を取て十二律を作しむ

晉律暦志に云黄帝伶倫に命じて律呂を作らしむ

簟　同

詩経斯干篇に下莞上簟とあり

竈　同

礼天官冢宰の屬に庖人凡寢中共爐炭とあれば爐は三代の制なり

炭　同

周の世に炭を作る　古今系始

扇　同

崔豹が古今注に舜五時扇を作りなどよし記せり今漢をとる扇は周武王の作る所と云事物紀原

粥　同

周書に云黄帝始て穀を煮て粥しなり

粉　一名餅糜　同

風土記云仲夏端午日菰の葉を以て粘米を包て栗棗乃灰汁を以て煮

煮て熟さしめこれを喫す陰陽包裹
するを象とするなり

湯餅　同

魏晋の代より世に湯餅を尚び食
今の索餅也語林に魏文帝何晏
に熱湯餅を賜ふるあれども別也
漢魏の間に起るなるべし

酒　同

酒經に云蒸米を稼して麴を糜
を以て醇醪をなす是酒の始也
呂氏春秋に云狄儀醪を作て五
味を変ず戰國策に云狄儀帝
女酒を作てこれを禹に奉ず禹
これを甘しとして遂に狄儀をうとめり
古史考に云狄儀酒を作る始

物志に云杜康酒を造る也帝王
酒は杜康作る不とり陶淵明集述
酒詩の序に狄儀酒をつくり杜康こ
れを御る也黄帝内傳に云王母會山
にして黄帝にあひ帝に奉ず護
神養気金液流暉の酒を以て又
延壽寿光の酒あり是すなわち黄帝
の時にたてり始あり古より今に至る
杜康始て酒をつくるをいふ也
代の人と云ふ也一説に云杜康林
酒を作る今案ずるに文選の注に杜康は黄帝の
時の人と也名義考に狄儀は女也と云
宋竇革が酒譜に云世に云酒の始て説
三あり一に云狄儀始て酒を作る禹と
時を同じくすと云ふ鍾とは酒
堯の時にあり禹の時に始るなるべし

平二ヨ云神農の本草ヨ酒の性味をあらはし黄帝の内経ヨも又酒の病を発するあれハ儀狄ヨ始るヨあらん平二ヨ云天ヨ酒星あれて酒の始るヨ天地ヨリ出せり予おもふにこの三説共ヨ以て按ずるにこれそれ儀狄乃名称典ヨ見えしてそれ世ヨに出しうもれ世本ハ信書ヨあらん又一説竟酒ヨ鍾といふてハもと孔叢子ヨ出し伝れ委巷の説あれハ取ヨたらん内経ハ黄帝の時ヨ出とハ云平二章を考ヨ六国秦漢の百ヨ出てる書也ヨ以て見れハ炎帝黄帝ヨ始て酒ありと云も按ずるに予おもふヨ伝れハ則酒ハ果して後より始るとせんや予

おもふヨいまし〳〵の智者これをつくりて天下後世これヨ志さうひてよく慶るるヨ有ヨ有ヨ人ヨ同く好むヨの物を絶て郊享燕ヨ用て以て礼の常とヨ為ハ〳〵いまし〳〵ハ飲食するヨ物ヨ始て飲食を始し〳〵ヨの人を和ふる所平始て酒をつくれる人をハ先酒とのきいひて後とヨとヨ云るヨをいそまる物ハいまし〳〵より平てるヨ詳ヨあらぶ添ふる〳〵好古博ヨる人ハ右ヨ志るせる所の酒譜の説ヨ理あり有ヨてヨ載ヨる

○茶

茶を飲ずる或説ヨハ梁天監武帝の代より始ると云其ヨ洛陽伽監記ヨ見へ志れ誤ヨり博ヨる人ハ呉志の韋曜

う侍る孫皓宴に食を設る毎日を度とす

とぞ云る所一斗度よつぶなる人縦呑

とかく酒を飲る卒七升を以て限

とぞ悉く口よりいつるも皆淺酒也

有度も韋曜もとより酒をのむ

二斗ばかりなれば茶茸を賜て

以て酒のうつるとあれを三度の時也

茶を飲するを志りんれも後世の

ぬく盛なるもの也 南窓記談 抄出

夷風堂隨筆より茶の用漢より始り

茶を飲る呉の韋曜より始るとそれ

も晏子春秋を食ふ晏子春秋

見へ漢王慶武都より買茶の語あれ

三国より茶はそれを飲る久し

茶経より茶の飲る神農氏より

おこり魯周公より世々少し 秋晏嬰

漢楊雄司馬相如 呉韋曜 晉劉琨張載遠

祖約 謝安 左思 侍皆茶を飲りとけり

茶の盛る世に行はるるは晉より始る

と家礼考證にかくのごとし

蹴鞠 同

劉向別録に云蹴鞠は侍に云黄帝造

れり或曰戰國の世より初る博物志に曰

黄帝はつくれる所なり

鬪鶏 同

列子に紀渻子周の宣王のために鬪鶏を

養ふのるあり左傳に季氏と郈氏と

鶏をたたかはしめるを述て季氏は

羽に芥ぬり郈氏は金距をつくと

いつてこれをおせを此ふれの始は周

り生るなり

角觝　同

今のお撲也漢武故事に云角觝いむし六國の世に作る不史記に秦二世甘泉宮にありて角觝をあ樂む注に云戰國の時まもく武を講ず戲樂をあつてお撲り手力を角志めて以てお觝寄しむ者てお角也漢武帝之を好めり

秋千　又鞦韆云

古今藝術圖に云小方の戎狄これを造て轆轤の繩を掛つて高く食の仙人に乗る

舞に云をるを後に中元の文をこれを学び別に繩をもて木に懸て架を立これを秋千と云或云もと山戎の戲也秋千柱の方山戎を別ちしより出戲始て中元に伝ふ

合歡草　稱若水本草別集

合歡草一名神草一名鐵掃帚俗名兎禿白絲

合歡草狀如著一株百莖晝則衆條扶疎夜則合爲一莖萬不遺一謂之神草晉王子年拾遺記

淡把姑　同

淡把姑又作淡芭菰或作淡婆姑一名煙草一名返魂草一名相思草按芝峰類說云淡婆姑草名亦號南靈草近歲始出倭國採葉暴乾以火爇熱之病人用竹筒吸其煙旋即噴之煙從鼻孔出最能祛痰墜下氣且能醒酒南蠻國有女人淡婆姑

者患痰症積年服此草得瘥故名

万年青　同

千年蓋一名蓋一名萬年青一名萬年春俗名和貌篤

蓋即千年蓋葉闊叢生深緑色冬夏不枯又名萬年青吳中家々植之以盛衰占興敗　明周文華致富全書

萬年青葉闊三寸高尺許　嘉興縣志

萬年青一名蓋吳中人家多種之以其盛衰占休咎造屋移居行聘治殯小兒初生一切喜事無不用之以為祥瑞口號種法於春秋二分時分栽每丹置背陰處俗云四月十四是神仙生日當刪剪舊葉擲之通衢令人踐踏則新葉發生必盛喜肥土澆用冷茶　清陳淏子秘傳花鏡

形草　同

接續草一名蕢一名牛脣一名水蕢一名續斷一名斷腸草一名愁婦草一名霜草一名寮莎一名問荊俗名思絫奈春時根旁生筍謂之筆頭菜可以為菹

毛詩傳云水蕢也如蕢斷寸寸有節拔之可復　晉郭璞爾雅註

蕢　同

地錦一名地噤一名地朕一名承夜一名夜光俗名紫他

陳藏器云地錦淮南林下葉如鴨掌藤蔓著地節處有根亦緑樹石冬月不死一名地噤穢茶注曰絡石石血亦花類也　嘉祐補註本草

山葵　同

蟬一名猩菜一名山芥菜俗名華索虛

猩菜字林云味辛南人食之去冷氣 宋 鄭夾澄昆虫草木畧

蝷菜味辛生山谷泉石間根葉皆可食 元李杲食物本草

根尤佳

蝷味辛辣如炙焊人故名亦作猩今攷唐韻玉篇並無猩字止有蝷字云辛菜也則蝷乃蝷字之訛爾蝷菜生南地田園間小草也冬月布地叢生長二三寸柔梗細葉二月開細花黃色結細角長一二分角內有細子野人連根葉拔而食之味極辛辣呼爲辣米菜沙地生者尤佳 明李東壁本草綱目

蝷有紅白二色 萬曆杭州府志

蝷生懸崖間味甚清 衡山嶽志

蝷同蕈六書故蕈俗作蝷蝷菜好生

高山泉源石上與石菖蒲一類盱亦有之李時珍謂爲田園小草非也朱晦菴飲後以蝷莖供蔬有蝷詩 清慶文英正字通

杯 同

娑羅樹一名七葉樹俗名篤七樹

盛弘之荊州記云巴陵縣僧寺牀下忽生一木不旬日蔚茂軒棟道人移居避之木即長遲但極晚秀有西域僧見之曰娑羅樹也彼僧所憩之蔭常著花至元嘉十一年忽生一花狀如芙蓉 太平御覽

山吹 同

棣棠花一名地棠一名麻葉棣棠一名金棣棠一名黃棠棣俗名養埋福絜千葉郁李花亦名棣棠與之同名異物今小木中卻有棣棠葉似棣黃花綠莖

而無實人家亭檻中多種之 宋沈存中夢溪筆談

棣棠花花若金黃一葉一蕊生甚延蔓有色白者又有單葉者名金盌喜水 明王仲遵花史左編

棣棠條生花淡金色梅聖俞所謂韡鄂芸殿後花是也 八閩通志

棣棠花黃無香 泉州府志

地棠蘺落間多種之 重修鎮江府志

棣棠或云即詩所謂棠棣今恐非一物 太倉州志

棣棠金色千葉而花繁單瓣者名金盌春深與薔薇同開紅潤燕脂黃香金雨亦可鬬麗折嫩枝扦之即活 清沈賦名花譜

燕子花 同

燕子花一名煙蘭俗名草巴紫按他按燕子花葉似紫羅欄葉而長三月中抽莖發花如紫菖蒲而大有數色又有四時發花者生水澤中

鮎 同

香魚一名記月魚一名細鱗魚一名溪鰛即挨油魚也

香魚鱗細不腥春初生月長一寸至冬月長盈尺則赴潮際生子生已輒橋惟鴈山溪潤有之他無有也一名記月魚 明馮時可雨航雜錄

香魚一名細鱗魚春初時生月長一寸九月後可盈一尺則赴潮際生子生已則黑瘠而死於鹹水中次年春初子復化爲魚苗仍淡水中隨月而長五月以後可長五寸味極清美作乾魚尤佳凡山水入江處皆有之 鴈山志

鯨　同

海鰌　鰌或作鰍一名海燕一名浴鯢一名浮礁一名海龍王一名海龍翁一名鯨奥其雌曰鯢俗名忽十賴按八閩通志云海燕魚有肉翅能飛水上別是一種與此不同

鯨魚者海魚也大者長千里小者數十丈一生數萬子常以五月六月就岸邊生子至七八月導從其子還大海中鼓波成雷噴沫成雨其雌曰鯢大者亦長千里眼爲明月珠　晉崔豹古今註

永明九年鹽官縣海浦有海魚乘潮來水退不得去長三十餘丈黑色無鱗未死有聲如牛土人呼爲海燕取其肉食之　南齊書

海鰌長丈餘　唐沉佺臨海水土記

風土記　鰌魚長數千里穴居海底入穴則潮上出穴則潮退出入有期節故潮水有期又名鯢魚　明陳仁錫潛確居類書

海鰍大者長數十丈海中浮載如一二里山俗呼爲浮礁舟行避之　寧波府志

海龍翁大如屋宇　雷州府志

海鼠　同

沙噀一名沙蒜一名塗筍俗名柰埋哥

沙噀塊然一物如牛馬腸臟頭長五六寸無眉無皮骨但能蠕動觸之則縮小如桃栗徐復擁腫土人以沙盆揉去其涎腥雜五辣煮之脆美爲上味樂清名沙蒜　馮時可雨航雜錄

雲雀　同

告天子一名鶐一名天鷃一名樂天一名叫天兒一名噪天俗名虛拔立

鶐爾雅曰天鷃郭云大如鷃雀色似鷃好

高飛作聲江東名之曰天鶅音綢繆之繆
按此雀類似鶉而尾小長以其能鳴故人多
養之俗呼告天　宋鄭夾漈昆虫草木略
有小鳥一飛直沖入雲翻身徑落其聲
唧々名曰告天子　明田藝衡留青日札
叫天兒似雀愈鳴而飛愈高　雷州府志
仰天高飛直入雲表鳴聲最急胡名叫天肇慶
府志
告天又名噪天善鳴春日野愈飛鳴愈飛
愈高　太倉州志
噪天麥熟時有之亦名告天子　常熟縣志

萍　潘岳秋菊賦
似浮萍之隨波云々

楊櫨　時珍本草
茶曰楊櫨一名空疏所在皆有生籬垣間其
子爲菜

豺祭獸　礼記王制
豺祭獸然後田獵

翡翠　張揖上林賦注
翡翠太小如爵雄赤曰翡雌青曰翠
虹　尔雅
蝃蝀謂之雩蝃蝀虹也注俗名爲美人虹江
東呼雩

木瓜　同
楙木瓜注實如小瓜酢可食
林檎　文選蜀都賦注
林檎實似柰而小味如梨
枇杷　同
枇杷冬華黃實本出蜀
石榴　文選蜀都賦

衛

石榴競裂

蒟蒻　同

其圃則有蒟蒻

蒲　同

[illegible]有櫫將叢蒲

菱　同

綠菱紅蓮

鴈　同

候鴈盡

獺　同

玄獺上祭

[illegible]稻　南都賦　文選註

李善曰樺似柟而黑　鸕鷀似鵝

而黑

大豆　同

李善　鄭玄毛詩箋云叔大豆也

巳日禊　文選南都賦

於是暮春之禊元巳之辰方軌齊軫禊于

陽瀕　注李善曰續漢書三月上巳宮人皆

禊於東流水上祓除宿垢疾云

富門陣　禁秘抄

上古上卿召兵衛佐令候御前諸衛警固

次諸陣見參令結祿近代不及如然之儀

雷鳴又送年疎近代如藏人持瀧呂侯御

緣若瀧口少々召御蟲令鳴弦御持僧參

會之時令念誦其外無別事

雨乞　同

祈雨先以藏人（扈非藏人）令拂神泉苑兼仰

行向集人先池邊石水灑高声一同云

雨乞八海龍王此事無所見欲近代

如此限七日無驗時暫藏人有驗時藏人參
申事由召朝餉内侍給御衣白衣或七瀬給
衣之

出居　同

松虫鈴虫類人々進之或被召賀茂社
司堀河院御時頭以下向嵯峨野誠有道
遥是給出屋向選出奉之

祈年穀　同

二月四日祈年祭前後齋白河院仰也

祈年穀幣　同

二季祈年穀奉幣前後齋

例幣　同

九月十一日例幣前後齋

新嘗會　同

十一月中卯日新嘗會自一日至其日辰
日解齋神事様同神今食

八幡放生会　同

八幡放生會皆有男女使當日神事也精
進可依社春日使立日神事也

四方拜　同

元日四方拜自夜前潔齋

雉　説文

雉有十四種盧諸雉喬雉鳩雉鷩雉秩々海雉
翟山雉翰雉卓雉伊雉伊洛而南曰翬江淮而
南曰搖南方曰蠻東方曰畐北方曰稀西方曰蹲

橘　同

橘果出江南

芸草　同

芸艸也似月宿淮南子説芸艸可以死復生

葦　同

葦、大葭也

菌　同

菌地蕈也

蓼　同

蓼ノ辛菜薔虞也

茶　同

茗茶芽也

芝　同

芝、菱也

蒜　同

蒜、葷菜ノ

蒐　同

蒐、蒐菜也

菊　同

菊大菊蘧麥

蟬　同

蟬以窮鳴者

蟆　同

蟆蝦蟆也

蠏　同

蠏有二敖八足旁行非蛇鮮之宍無所底

桃　李　日本書紀

推古天皇三十有四年春正月桃李華之

うづ　日本書紀

推古天皇十有六年曰皇子諸王諸臣悉以金髻華著頭

元日節供　鹿柔嵐叢鈔

正月一日節供表安樂相宿曜經云日名建日又名吉祥日宜作長久之事

三月三日節供　同

三月三日節供爲除時氣病也以桃花浮
美酒服病患不發

五月五日　同

五月五日節供爲拂毒虫也夏毒虫多上他
國毒虫多交入家是故菖蒲艾草蓋屋上

七月七日　同

七月七日節供爲除瘧鬼也昔高辛氏小子
是日死然成足鬼致瘧病生日常嗜麥餅
故此日以麥餅祭之年中離瘧用麥索此謂
也十節記見ヘタリ

草餅　同

或說云三月三日草餅鬼皮トテ食也昔平舒
三女子此日河中死又黃帝ノ子三男子此日死何
粉餅作是祭也

菖蒲　同

五月五日菖蒲昔平舒王臣楚屈原字靈均依
讒言被流罪江畔遂投身死怨念成毒龍國
亡サントス干時國王彼制伏樣成給彼虵頭赤
身青似菖蒲取髮結腰纏又屋軒菖根
刻酒入窕樣ヲシ給ヘハ其虵耻恐道飯不来
アヤメト云ハ彼毒龍名也又混明池菖蒲根
一寸内百節アリ是ヲ刻酒入呑除衆病

索麵　同

七月七日索麵鬼腸トテ食之高辛帝ノ
小子七歲ニメ此日死湯以祭ル然巳干時沐浴
衆病除索麵以祭テ下食スレハ其年瘧
病ハ不病也

左右近馬場騎射　同

古今第十一事書左近馬場ヒヲリノ日ト
書ケルニ付テ樣々ノ義アリサハ古今第

一難義ト云ヘリ六條左京大夫顯輔卿ハ
左近馬場ヒヲリノ日ハ天下第一難義也トヲ
仍色々異説アリ然レ共多分五月五日ヲ
歌其一トヲリヲ注サハ五月三日左近馬場荒手
結四日右近荒手結也五日又左近真手番六日
右近真手番也荒手番日近衛舎人水干袴
袴舉テ褐尻ヲ女ナカユヒタル様ニ引出テ
其上行騰結著也真手番日紅下袴織物
ノ指貫袴モ不舉ソハヲハサミテ褐ノ尻ヲ袴
ヲリ前様ニ引袴衣デ前ニハサム也サレハ此
真手番日ヒヲリノ日トハ云也真手番日ハ
次第ヲ立テ相手モ定レハ強引袴衣也但
近代真手結日モ水干袴ニテ荒手結ト同
様ナレハ其体不違故委辨ヘ知人ナシトヲ
今一向侍ラス俊頼卿法性寺殿ニテ五月

五日ノ歌ニ　ナカキ根モ花ノタモトニカホルセケ
フヤ真弓ノヒヲリナルラン　トヨマレシヲ顯季
卿傳聞テ難義ヲハ難義ニテコソ置ベキニ
無左右云定ム不便事也トナン清輔卿モ
左近馬場真弓真手番日也五月五日也ト
云ヘ此人々モ五日トスル也但業平手カラ紙
屋紙ニ書ケル伊勢物語朱雀院塗籠ニア
リケルニハ右近馬場ト書リトヲ然ラハ六日
ナルヘキ歌

螢　同

螢聚トイフハ車胤カ學問スル事歌　車
胤聚螢ト蒙求ニイヘハサコソト思ナラハ
セトモ兼名苑ニハ呉温龍夜讀書光油
拾螢自照イヘリ同テイノコトアルニヤ必
車胤ニハカキラサル歌

聖一國師忌　同

聖一國師東福寺開山本名圓爾房壬戌年生ル御門御宇建仁二年也七十九歳弘安三庚辰年十月十七日入滅

御弓事　同二

神功皇后異國征討御時多羅樹真弓ヲ持給故ニ其ヨリノ御タラシトハ云也則御弓ト書也年中行事ニ兵部省ノ御弓ト書テヲンタラシト点ニ侍リ

人丸　同三

尾州葉栗郡光明寺ト云寺アリハクリノ尼寺ト名是飛鳥淨御原御宇丁丑小九中葉栗臣人麿始建立ミヱタリ是歌仙非ス同名也サレハ柳人丸栗人丸アリケル二コリ柳ヲハウタヨミノ人丸栗ヲハツクリノ人丸ナルヘシ

脇　同五

脇脇ト書テアカヽリヒヾト讀也又疹ノ字ヲモヒヽトヨメハ是モヤマヒニヤ輝ニ云字也

朝賀　同七

朝賀事朝拜共申也是元正賀奏スル事也諭ヘハ去年ノ日出嘉瑞共ヲ注今日是ヲ奏スレハ奏賀奏瑞トテ二人庭ニ進テ祝ヒ申也其儀式ハ大極殿ノ高御倉ノ看給人々礼服ヲ着御即位如幡ヲ振テ万歳ヲ唱ル也一條院御宇正暦ヨリ後ハ此事ナシトナン

白馬節會　同日

白馬節會事正月七日也天武天皇十年正月七日始ルトナン白馬アヲムマト讀也其心

馬陽歡也青春色也仍テ正月七日馬見年中災除クト云本文侍ルトナン御馬數三七疋一匹ナルヘシ三才傳ル由寛平ノ御記侍ルトナン

御齋會　同

御齋會事自正月八日至十四日七箇日也天武天皇元年始金光明經ヲ講セラルヽトヽ云ヽ於大極殿八日ヨリ七ケ日最勝王經ヲ講讃セラル是朝家御祈ノ爲也此經國家護持スル甚深ナル故トヽ云ヽ

蹈歌　同

蹈歌節會事十四日十六日兩日アル也是男蹈歌女蹈歌トテ兩度侍リ女蹈歌中ハ大方京師遊士聲能テ物歌ヲヨヲ召テ年ノ始祝詞作テ歌ハセ舞ヲマハセテ御覽セラレケル也此蹈歌ウタフ歌曲ノ此殿ト云秘曲アルトカヤ

旬　同

旬事是四月一日アル事也天武天皇十二年始トナン文武官人畿内住人向テ孟月必朝參ス旬樣々義アリ内裏新シク造ラレテ始南殿行ハセ給ヲハ新所旬ト申也位即セ給テ始テ政望ミ給ヲハ万機旬ト申ニヤ此四月旬ト申也此旬ニハ内侍扇持テ上達部ニ賜ヘハ膝ヲツキテ請取作法ナント侍ルトナン

賑給　同

京中賑給事五月撰吉日政ナレハ日不定ラ也寅申及亥日ニハ不賑給

道鄽食堂　同

道饗祭事六月晦日被行事也ト部氏人於京城四隅道上而祭之也其心自外来ラン鬼魅敢京師不令入故豫道迎饗遇也仍道饗祭ト云也夏冬二季祭也冬十二月晦日也

鎮火祭　同同

鎮火祭事六月晦日也風土記曰諸在宮城四方角ト部等鎮火而祭爲防火災也故曰鎮火ト云是夏冬二季アリ冬ハ十二月也

乞巧奠　同同

乞巧奠事七月七日七夕祭リ也風土記曰七月七日牽牛織女會天河俗掃庭露施机筵牽牛ヲ爲夫織女ヲ爲婦七月七日庭上机ヲ立テ供具ヲ備ヘ香花ヲ調ヘテ又筆前色々系懸織女ニ供ニ奉ル也只是織女祭リ也

相撲節　同同

相撲節事七月廿五日アリ廿九日マテ侍也

祈年穀奉幣　同同

祈年穀奉幣事七月也撰吉日政ナレハ日不定也是廿一社御幣ヲ奉テ年穀田苅事ヲ祈申ル事也トナン

定考　同同

定考事八月十一日十二日兩日アル也十二日アルヲハ小定考ト申也凡此定考ト申事昔六位已上加階叙スル人其藝能行跡撰榮爵ヲ賜リケル也選叙令ナント申文ニ委シク註サレ侍ルトナン德行才名格勤ナントニ依テ官爵ヲ賜ケル也此人々ヲ選ヒ出シ定メ侍リ定考ト申也但文字ニハ定考ト書タレ共打返メカウチヤウト讀ミ侍リ是又ハ傳ニテ侍ル也尤故アル事トナン

御燈　同月

御燈事九月三日也是天子北斗灯ヲ奉リ給事也今久絶テ只御祓ヘ許リ侍ルトナン是ヲ行レシ時ハ北山靈厳寺ト云所ニテ高キ嶺ニ火ヲ燃メ北辰ニ供セラレケルトナン

不堪田奏　同日

不堪田奏事九月七日也是諸國田ノ損ノ作ルニ堪ヌ所々ヲ目録ヲ書テ奉リケレハ其ヲ付テ租税ヲ三分一ナントヤ免シ給事アリシ也

豐明節會　同月

豐明節會事十一月辰日也又宴會共書ル昨日神ニ手向奉リシ昨ヲ君モ聞食シ臣ニモ賜ハン爲ニ節會ヲ行ハルヽ也

賀茂臨時祭　同月

賀茂臨時祭事十一月下ノ酉日也宇多天皇寛平年中ニ始給也

内侍所御神楽　同月

内侍所御神楽事十一月下酉日臨時祭同日也寛平ノ御宇ヨリ始ル云ヘ賢所ニテ毎年侍ルトナン

荷前　同月

荷前事十二月也荷前ト云ハ先皇御陵ヘ年替リ幣帛ヲ奉セ給也十二月五日ニ此荷前ノ日定メラルル也同十三日ニ奏ノ議以上ヲ點定メテ奏聞セラルヽトナン

虹　同月

虹ハ日輪ノメクリノ半ヨリ上ニアマクモ映シテ見ル也傳聞録ニ虹霓ハ但是雨中日影也ト云ヘリ

月兎　同月十四

月ノ中ニ有兎云就之其義多ケレ共只過去ノ
霊兎ノ白骨ヲ取テ帝釋月中置給故トカ

月異名　同十種

銀鈎　玉鈎　銀光　玉鏡　金魄
金波　菟輪　菟影　兎魄　兎月
桂輪　桂影　仙蛾　陰精　虧弓　織月也
蛾眉　同上　破鏡　半月也

十二月異名　正月　同　同
大蔟　孟春　初春　新春　上春
端月　初陽　端春　建寅　肇年
二月　同　同
交鐘　仲春　仲陽
三月　同　同
沽洗　季春　暮春　暮陽　花月
四月　同　同

先ヨリ下冬ノ異名ヲ記ス可シ但サス

雜

仲呂　孟夏　初夏　首夏　維夏
五月　同　同
蕤賓　仲夏　起夏
六月　同　同
林鐘　季夏　晩夏　極暑
七月　同　同
夷則　孟秋　上秋　初秋　初商
新秋　肇秋
八月　同　同
南呂　仲秋　仲商
九月　同　同
無射　季秋　暮秋　窮秋　杪秋
杪商　季商　季白　玄月
十月　同　同
應鐘　孟冬　初冬　陽月　玄英

上冬

十一月　同　同

黄鐘　仲冬　子月

十二月　同　同

大呂　季冬　暮冬　晩冬　杪冬

窮冬　黄冬　極月　臘月

四季異名　春　同　同

早春　上春　孟春　新春　初春

献春　開春　陽春　王春　芳春

花春　三春　首歳　献歳　上陽

孟陽　載陽　艶陽　青陽　韶陽

三陽　上月　端月　花月　青律

芳辰　韶節　韶光　孟陬　和暖

淑景

夏　同　同

初夏　孟夏　首夏　炎夏　朱夏

九夏　朱明　朱律　丹律　炎暑

炎景　炎節　炎天　景天　長嬴

秋　同　同

初秋　孟秋　新秋　三秋　肇秋

清秋　涼秋　杪秋　早秋　凉天

旻天　白藏　三商　九商　素秋

金秋　残暑　季秋　素商　仲商

素律　金律　仲律　仲月　晩月

残熱　餘熱

冬　同　同

早冬　初冬　孟冬　三冬　九冬

仲冬　季冬　窮冬　杪冬　暮冬

嚴冬　玄冬　寒冬　嚴凝　玄陰

陰律　陰英　陰天　陰蕈　陰

周年

鬼灯　先代舊事本紀

有一神眼如八咫鏡而絶然似赤酸醬

興福寺　慶深塩壺裏鈔十九

興福寺ハ淡海公ノ氏寺　元明天皇和銅三年

庚戌建立初大織冠孝德天皇三年丁未十月

山城國山階郷草創アリ仍山階寺ト云

園城寺　同同

園城寺ハ天智天武持統三代勅願トメ天武

天皇三年ニ建立教待和尚草創

東寺　同同

東寺柏原天皇延曆十三年甲戌十二月廿一

日遷都後同十五年丙子羅城門左右東西

二寺建給フ藤大納言伊勢人ヲ以テ造寺

長官トメ草創ニ給所也

狗犬　續日本後紀

美和元年春正月壬子朔癸丑以鷹鷂

各二聯鳴鳥大四牙獻于天皇

蠶　神代史一書

即軻遇突智娶埴山姫生稚產靈此神

頭上生蠶與蠶

蛆　同　一十三丁

伊弉冊尊曰吾已飡泉之竈矣雖然吾

當寢息請勿視之伊弉諾尊不聽陰見之則

膿沸蛆流

雷　同　一十七丁

所謂八雷者在首曰大雷在胸曰火雷在腹

曰土雷在背曰稚雷在尻曰黑雷在手曰

山雷在足曰野雷在陰曰裂雷

涕　同　一三十丁

以蜜爲白和幣 以漆爲青和幣

みそさゝね　同一四一丁

有一箇小男以白鞦皮爲弁以鶴鷄羽爲衣

鶏　同二三十四

用鸕鷀羽爲草葺之

節分　卧雲日録

文安四年十二月廿二日明日立春故及昏景二毋室散豆因唱鬼外福内四字蓋此方驅儺之様也

煤拂　分喪神記

陰陽雑記曰器物百年をへて化して精霊を好てより人のかを誑惑こまきを分喪神と號をといへりこまによりて世俗毎年立春に先立て人家此多くは是をたゞいさゝして泥灰にすつるゆゑ百年に一年あらぬ分喪神此災難に逢はしむ也

入梅　櫻陰齋談

梅雨以三十日爲其限歳々試之出梅之日必有雷雨本草綱目曰芒種後逢壬爲入梅小暑後逢壬爲出梅

梅　羅山東見記

晉の起居注曰晉武好文則梅開廢學則梅不開故梅云好文木也

佛誕生　遵生八牋

玄樞經云二月初八日乃佛生日也

蓮花　法苑珠林

佛本行經曰大龍池中多五色蓮華

石榴　　太平御覽

北史曰齊安德王納李祖收女為妃后帝幸李宅宴而妃母宋氏薦二石榴帝前帝投之問魏收曰此竟何意收曰石榴房中多子王新婚妃母欲子孫衆多帝大喜

鴨葵祭　　天成紘

大臣貴尊兒吋鉏高彦根命坐大和國高鴨社任意風雨之々月讀尊為水任信以天高田坐乃授以下之逐成雷分雷下而列於山背國御城上郡永如鎮坐以天夏井水盛包葵葉將為御手洗故名分雷也

麥秋　　礼記月令

孟夏之月之々麥秋至

夏越祓　　世諺問答

自天武御宇有此祓謂祓除夏秋相剋之義

九月十三夜　　中右記

保延元年九月十三夜今宵雲淨月明是寛平法皇明月無双之由被御出仍我朝以九月十三夜為明月之夜

二百九十一說

日本歳時記冬斗引有外三時十二引メスヘキヤ

律曆志ト斗有之ハ多分漢書之律曆ナフ

後文ニ見ヘシ分奉物記系ハ若シ号之ヤ事物記系ニシテ心ツケベシ

神社歴案ニ詳ナリ追々出入ヘシ

礼記之註ト有之ヨハニ了朱註ト相ムヘキヤ

本草類標題

神農本艸經　李時珍之藥錄

陶弘景名醫別錄　唐慎微證類本草

吳普本草　朱震亨本草衍義補遺

蘇恭唐本草　甄權藥性本艸

孟詵食療本草　秦承祖方

陳藏器本草拾遺　汪機本草會編

韓保昇蜀本草　陳士良食性本草

馬志開寶本草　海藥本草李珣

蘇頌圖經本草　食物本草明汪頴

大明日華諸家本草

冠宗奭本草衍義

吳瑞日用本草

甯原食鑑本草

掌禹錫嘉祐本草　補註

周憲王救荒本草

国立公文書館
National Archives of Japan